

ARTLET

慶應義塾大学アート・センター ARTLET 第47号

FEATURE ARTICLES

アートと地域連携

「人間形成」と「オープン・フォーラム」のいま
本間 友

地域に開かれたキャンパスをめざして
新倉 慎右

教育普及プログラム ミナコレ・親子向けワークショップの報告
堀口 麗

芸術を超えて～大学と地域の連携と協働
森下 隆

アートを契機とした地域の「学び」への接続
森山 緑

INFORMATION

活動報告



上：演説館へと向かう建築ガイドツアー参加者たち
下：鎌倉美術館プレオープンイベントの様子

アートと地域連携

大学で展開する研究活動や大学内の文化財を社会に発信し、また地域と共有していくことは、アート・センターの活動を構築する重要な柱の一つである。そして2013年、博物館相当施設に指定されたことをきっかけとして、社会・地域と大学を相互的な働きかけを通じて結びつけることを目指した様々な取組が展開している。

本特集では、アート・センター開設以来の地域連携に関わる活動を振り返りながら、近年の新たな試みについて紹介を行う。

「人間形成」と「オープンフォーラム」のいま

本間 友

(慶應義塾大学アート・センター所員)

TEXT: HOMMA, YU

人間形成とオープン・フォーラム。1993年の設立時の理念に掲げられたこの二つの言葉が示すように、慶應義塾大学アート・センターは、その設立の当初から、大学の創造的で高度な専門性を発信すると同時に社会教育の場としても機能する、開かれた研究所を指向してきた。この方向性は、アート・センターが行ってきた活動、とりわけ地域への／地域からの働きかけのもとに行われた種々の催事や講座によくあらわれている。アート・センターが地域と共同で行ったイベントの一覧を右頁に記載したが、1994年に開催された「港区民大学」を嚆矢として、大学所在地である港区との共同事業を中心に、講演、公演、ワークショップ、展覧会といった活動がコンスタントに展開されてきたことがわかる。

そして2011年からは、慶應義塾大学南別館1階の展示スペース(慶應義塾大学アート・スペース)で年間を通じて展覧会を開催するようになった。続く2013年にアート・センターは博物館相当施設として指定されたが、博物館相当施設への指定は、

アート・センターに社会教育機関としての役割をあらためて付与するものであり、以来ますます活発に、アート・センターの活動を地域と連携させる試みが行われている。

アート・センターの近年の地域連携活動は、大きく3つに分けることができる。まずは、大学と地域、それぞれの文化資源を接続し活性化させる一連の試みがある。たとえば、展覧会「港区の学校建築—震災と復興」(2013)は、三田キャンパスの建築物と港区内の学校建築を、復興建築という観点から結びつけようとするものであり、「慶應義塾大学アート・プロムナード：三田山上で出会う近代建築と彫刻」は、敷居が高いと感じられることも多い大学のキャンパスに地域の人々を招き入れ、学内に点在する美術作品や建築物の鑑賞を促すイベントだった。アート・プロムナードではさらに、スマートフォンを利用したオーディオガイドの導入、ガイドツアーや子供向けワークショップの開催など、これまでのアート・センターの活動から一歩踏み込んだ、一般向けの教育普及活動を実施している。これらの取組については、本特集に寄稿している新倉慎右、堀口麗のレポートに詳しい。

第2のグループは、大学を結節点として、地域と世界を繋ぐ試みである。詳細は森下隆・森山緑のレポートに譲るが、2014年から2016年までの3年間、港区文化芸術活動サポート事業の支援を受けて開催した「海外ダンサーシリーズ」では、海外から招聘したダンサーが大学から飛びだし、周辺の

寺院や地域の施設でパフォーマンスやワークショップを展開した。

第3の試みは、アート・センターのアーカイブの活動や収蔵資料を通じた地方との連携である。土方巽の出身地である東北地方、とりわけ生地秋田との合同プロジェクト(国際カンファレンス&公演「PSi 2015 TOHOKU / PSi AOMORI FRINGE」、展覧会「鎌鼬美術館設立記念 KAMAITACHIとTASHIRO」)などは、この試みの典型的な例といえるだろう。土方巽アーカイブの重要な研究テーマの一つに、土方巽のテキスト「病める舞姫」の解明がある。アーカイブでは、秋田の風土や、土方の幼い頃の記憶が練り込まれた「病める舞姫」を読み解くため、土方巽の秋田時代に関する研究や秋田の習俗に関する研究が進められているが、これらの研究の過程において、秋田や青森の芸術団体や地方自治体との共同が実現され、大学と地方が連携するプロジェクトが展開することになった。さらに、地方で行われたイベントには、調査のために大学を訪れた研究者やアーティストも参加している。つまりこの活動は、大学と地方との直接の連携だけではなく、その連携を通じて、人々が大学から地域へ、東京から地方へと越境的に広がっていく動きをも描き出す試みだったといえる。

開かれたユニバーシティ・ミュージアムへ

最後に、これまでに紹介したアート・センターの

地域連携活動の特徴をあらためて記した上で、今後の展開の可能性について考えてみたい。

アート・センターの活動の第一の特徴は、大学付属研究所がその研究を下敷きにして行う活動であること、そして総合大学の強みとして、学内の多様な専門家と対話を通じて、様々な切り口からの企画を展開できることにある。アート・センターが開催する展覧会、シンポジウム、ワークショップなどのイベントでは、打ち上げ花火のような一過的な活動に終わらぬよう、日常の研究活動と結びつけた企画の立案や提供を心がけている。

いま、アート・スペースでの展覧会や外部資金によるプロジェクトを中心に、専門を異にする大学内の様々な研究所とのコラボレーションが行われているが、今後、アート・センター自身の研究や収蔵作品情報の発信だけではなく、こういった学内研究所とのコラボレーションの成果を地域に示していくことによって、大学の研究活動や、大学の所蔵する文化財を地域に開く窓口としての役割を果たすことができるのではないかと考えている。

日吉キャンパスのHRP(Hiyoshi Research Portfolio)や湘南藤沢キャンパスのORF(SFC Open Research Forum)、理工学部の慶應科学技術展のように、大学の敷地内で、あるいは外部の施設を会場として、研究の紹介を行う活動が活発に行われている。たとえばこのような研究紹介の場を、さらに周辺の地域に延伸することを考えてみるのも面白いかもしれない。イギリスやアメリカなどにおいては、「Festival of Ideas」といった名称のもとに、地域の聖堂やギャラリーなどを幅広く利用し、展覧会や講演会、ワークショップなどが実施されている。このような試みは、大学の文化財・研究活動の発信と地域との関係を、もう一段進展させる例として非常に興味深い。

そしてまたアート・センターの活動は、その国際性によっても特徴づけられる。アート・センターのアーカイヴは、海外からやってくる研究者に多く利用されており、シンポジウム等のイベントにも国際的な聴衆の参加をえている。一方で、こういった来訪者の多くから、日本国内の研究情報、また展覧会やパフォーマンスなどの芸術文化に関わる情報に、海外からアクセスするチャンネルがないという声が寄せられてもいる。これらの声のすべてに応えるような情報発信プラットフォームの整備には、もちろん、より大きな、公的な枠組みでの取り組みが必要であることはいうまでもない。しかし、対象とする情報の範囲を限定することによって、たとえば研究所の主たる研究主題にまつわる情報や、大学の周辺地域に関わる情報に絞り込むことによって、小規模ではあるが有効な情報提供を実現できる可能性はある。これまでの活動で培ったネットワークを基盤として、大学とそれを取り巻く地域に存在する、いまだに見つけられていない研究情報、あるいは文化財に関わる情報の発見を支援するようなモデルの構築を模索したいとも考えている。

アート・センターの地域連携活動

(カッコ内に連携や助成に関わる自治体・地域組織を挙げた)

1994年度
平成6年度春学期港区民大学「慶應義塾大学公開講座 生活の中のアート」(港区教育委員会)
港区在住・在勤の社会人80名を対象に「生活の中のアート」をテーマとし、全8回の講座を開講

1996年度
連続講演会「ふれあいの場としての街を考える」(港区ふれあい文化健康財団)
港区の施設を利用し、都市を巡る今日の問題と文化装置の都市利用の可能性に関する講演を実施

1998年度
ワークショップ「港区立港陽中学校のランドウーガ」(港区スポーツふれあい健康文化財団)
1998年から3年間実施。港区立港陽中学校の全生徒を対象とした音楽企画

2003年度
ワークショップ「港区立赤坂中学校のランドウーガ」
港区立赤坂中学校の生徒を対象とした音楽企画

2006年度
港区アート・マネジメント実践講座
「入門編+ワークショップ」(港区)
港区と共同した人材育成パイロット事業。専門家による講義に加え、大学・企業・ギャラリー・行政が連携した展示とワークショップを実施

2007年度～2010年度
「港区アート・マネジメント講座」(港区)
在任・在勤・在学者を対象としたアート・マネジメント講座。入門講座、公開講座、ワークショップの三部構成で、2007年度から2010年度まで実施

2009年度
展覧会「草月アートセンター 印刷物という『半影』」(港区文化芸術振興基金)
草月アートセンターで1958～1971年に展開した実験的・先進的な芸術活動を、草月資料室に保管されている印刷物で紹介する展覧会

2010年度
公演「土方異「病める舞姫」を秋田井で朗読する」(東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト)
秋田県東京事務所の協力を得て、慶應義塾の学生が調査、台本執筆、出演する朗読公演を実施

2011年度
公開講座「震災復興と学校建築」(港区文化芸術活動助成事業)
関東大震災後に建設された港区内の学校建築群を、復興建築という切り口で取りあげ調査し、その成果を公開講座で発表

2012年度
慶應義塾の建築プロジェクト+歴史を生かしたまちづくりセミナー「日吉の近代建築」(横浜市都市整備局)
慶應義塾大学日吉寄宿舍のリノベーション工事終了と横浜市認定歴史的建造物への指定を契機として、日吉寄宿舍および日吉キャンパスに残る近代建築に関する講座を、横浜都市デザイン室のセミナーの一貫として開催

2013年度
展覧会「港区の学校建築―震災と復興」(港区文化芸術活動助成事業)
2011～2013年度に実施した、港区の学校建築に関する調査活動の成果を公開する展覧会

講座「地域におけるアーツ・マネジメント人材(文化ボランティア)育成」
2006～2010年まで実施した港区アートマネジメント講座の受講生の一部の協力を得て、現状の問題点を確認し知識を更新する講座を開講

2014年度
公演「海外女流 ダンサー・ウィーク 東京」(港区文化芸術活動サポート事業)
海外からダンサーを招き、慶應義塾大学のスペースおよび港区内のスペースを使用して公演・ワークショップ・シンポジウムを展開

公演「土方異「病める舞姫」を秋田井で朗読する」(秋田版)」「(秋田版「病める舞姫」上演実行委員会)
2010年度の公演を下敷き、秋田にて朗読公演を実施

2015年度
公開ワーキング・グループ「アートと社会のつながり：動き出す日本の文化資源」
地域の文化資源と社会のつながりについて、現状の課題と今後の方向性について意見交換

国際カンファレンス&公演「PSi 2015 TOHOKU / PSi AOMORI FRINGE」(PSi・青森・フリンジ実行委員会)
パフォーマンス研究に関わる国際カンファレンスの開催に際し、青森の芸術団体と共同で国際的な観客に向けた公演、ワークショップ、上映会を実施

土方異メモリアル30「男鹿で土方異に出会う」(土方異記念秋田舞踏会、男鹿市)
秋田で活動する芸術団体と共同で、秋田県男鹿市にて公演、ワークショップ、フィールドワークを実施

研究会「文化による地域創生～北東北からの報告」
秋田、青森で共同で事業を開催したパートナーを招き、地域と密接につながりつつ、地域を越えて展開する文化活動について議論

公演「舞踏交流・海外ダンサーシリーズ Vol.2：世界から BUTOHがやってくる!」(港区文化芸術活動サポート事業)
海外からダンサーを招き、慶應義塾大学のスペースおよび港区内のスペースを使用して公演・ワークショップを実施

見学会「慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード：建築特別公開日」
シンポジウムや展覧会の開催に合わせて行ってきた慶應義塾大学構内の建築見学会を、自由見学形式で開催

2016年度
アート・アーカイヴ資料展XIV「鎌鼬美術館設立記念 KAMAITACHIとTASHIRO」(羽後町)
秋田県雄勝郡羽後町における「鎌鼬美術館」の設立を記念した展示を、羽後町で美術館の設立運営に携わる人々の参加をえて開催

見学会「慶應義塾大学アート・プロムナード：三田山上で出会う近代建築と彫刻」(港区ミュージアムネットワーク)
港区ミュージアムネットワーク企画「ミナコレ」の一環として、大学構内の建築見学会を開催。ガイドツアーおよび親子向けワークショップも実施

公演「舞踏交流・海外ダンサーシリーズ Vol.3：ジョグ・ジャカルタから、魂の踊り・音楽と仮面舞踊」(港区文化芸術活動サポート事業)
海外からダンサーを招き、慶應義塾大学のスペースおよび港区内のスペースを使用して公演・ワークショップ・レクチャーを実施

レクチャー「港区ミュージアムセミナー」(港区立三田図書館)
区内にある美術館や博物館などの活動を紹介する港区ミュージアムセミナーに参加、研究・展示活動を紹介



ふだんは非公開の演説館内部で解説を受ける参加者



猛暑のなか、2時間ほどかけて三田キャンパスをめぐる

地域に開かれたキャンパスをめざして

新倉 慎右

(慶應義塾大学アート・センター学芸員補、
東京薬科大学非常勤講師)

TEXT: NIHKURA, Shinsuke

建学から150年を過ぎた慶應義塾大学では、その歴史のうねりの中でさまざまな建築物が現れ、そして壊されていった。しかし時代の荒波に抗して、変わらぬ姿を保っている建築物もまた慶應義塾には残されているのである。塾内で最古の歴史を誇る三田キャンパスでは、とくに多くの歴史的建造物を目にすることができる。戦災からの復興を担った谷口吉郎による建築物はその悉くが建て替えられてしまったものの、福澤諭吉が重視した演説のために建設された演説館や、慶應義塾の象徴たる図書館旧館は、日本の近代初期における建築の優品と呼ぶべき作例であるといえよう。

慶應義塾大学アート・センターでは「慶應義塾の建築プロジェクト」として、塾内に残された歴史的価値のある建築物の保存・普及の取り組みを行っている。我々はとくに近隣住民や学生に対して塾内建築物に対する認知を広げることに重点を置いている。文化財を活用して地域へ開いていくことで関心を惹起し、保存へつなげていくこと

がこのプロジェクトの命題である。今年度はその一環として、港区が企画するミナコレ(MINATO COLLECTION)に参加し、義塾が位置する港区在勤・在住者に対して塾内建築物(及び野外彫刻)を鑑賞してもらう機会を設けた。「三田山上で出会う近代建築と彫刻」と題したこの催しは、キャンパス内にある建築物の位置と名称を示したマップとそれぞれの解説を記したシートを所定の場所で配布し、参加者にはそれを手に自由にキャンパス内を散策、鑑賞してもらう形式で実施された。

通常大学のキャンパスは普段から出入り自由であるものの、直接関係のない人間にとっては入りづらい空間であることは確かであろう。しかし建築物を鑑賞するためには現場に赴かなければならないため、入構に対する抵抗感は建築物の普及活動にとって厄介な存在であるが、港区との共催イベントとして打ち出すことにより、幾分それを緩和することができたと考えられる。また、自由に鑑賞してもらう以外にも、ガイドツアーを開催して理解を深めてもらったり、対象となる建築物は一部のみであるとはいえオーディオ・ガイドを試験的に導入したりと、できるだけ簡便に塾内建築を体感してもらえるように配慮している。

平素より建築に関する活動は周知しているものの、普段から建築に対して関心のある層にのみ広報が届くことが多いという状況であり、建築に関係していない集団に対する広報活動をどのように展開していくかということがひとつの課題であった。しかし、港区によるミナコレに参加することにより、当センターが普

段広報の対象にできていなかった層にも情報が届いた結果、今回の催事に500名余という多くの参加者を数えることができ、大きな収穫となった。

筆者が担当したガイドツアーでは、専門用語や複雑な解説は避け、建築物の塾内における位置づけや特徴などを楽しんで聞いてもらえるように配慮した。それが奏功したか、実施後に回収したアンケートからは、普段触れることのない建築物の鑑賞体験を喜ぶ声が多く聞かれた。今回のイベントでは、平常時は立ち入ることができない演説館や旧ノグチ・ルームといった、塾内でも貴重な建築物が解放されていたため、参加者はこれらの空間に入って鑑賞すると同時に、建築物と義塾との関係、建設に至る歴史的な経緯といった話を熱心に聞き入っていたのも印象的であった。近隣に住みながら初めてキャンパスに足を踏み入れ、塾内の素晴らしい建築物に感激したという声があったが、これは、少なくともガイドツアーにおいては、イベント自体の目的が達成されているということの証左ともなろう。

日本中でモダニズム建築が取り壊しの危機に瀕しており、往々にしてそれらの保存運動が盛り上がり欠けているのは、近隣地域に住む人々がそうした建築物に親しむ機会がなく、他人事として受け止めているからであると考えられる。したがって、今回のイベントのように、学内だけでなく、地域をターゲットとして普及活動を定期的に行い、さらに認知を広げていくということは建築物の保護に大きな力となってくるはずである。



8月27日のワークショップの様子



教育普及プログラム ミナコレ・親子向けワークショップの報告

堀口 麗

(慶應義塾大学アート・センター学芸員補)

TEXT: HORIGUCHI, Urara

今年度8月、アート・センターは港区連携プログラム「ミナコレ2016 SUMMER MINATO COLLECTION」に参加、「三田山上で出会う近代建築と彫刻」を開催した。本プログラムは、慶應義塾大学三田キャンパス内にある多くの建築物や美術作品を、アート・センターが独自に作成したマップと解説を手に参加者が自由に見て廻り楽しんでもらう企画であった。これに関連するイベントとして、開催期間中、特別にツアーを二本設けた。ひとつがガイドツアー「近現代建築と彫刻が奏でる『交響詩』」、もうひとつが親子向けワークショップ「慶應三田キャンパス 夏休み教室へ建築&彫刻鑑賞編〜」であり、本稿はその報告となる。アート・センターにとって、ミナコレはさることながら、こどもを対象にしたワークショップも初めての試みであり、走り出しの当初は手探りの企画内容にそこばくの錯誤もあったが、美術館での教育普及に経験のある所員が中心となり無事に運んだ。

夏休みの自由研究にも代用できるような内容とし

て、三田キャンパス内に点在する建築物や美術作品を目で見る、触る、といった体感を得る、さらにそこから発展させておのおのが感じたことや考えたことを言葉や工作で表現する体験型ワークショップを目指すことにした。ワークショップは正味三時間、二部構成とし、暑さの中でもこどもたちが無理なく歩いて廻れるコースを設定した。前半にはキャンパス内の彫刻や建築物を鑑賞、後半は旧ノグチ・ルームに移動し、室内を鑑賞したのち、作時間となる。参加の対象は、内容を鑑みて小学校中〜高学年とし、保護者の同伴をお願いした。コースの流れに沿って書き込み式のワークシートを用意し、参加者全員に配布した。シートには、マップ、鑑賞上の注意を促すページと、作品ごとにタイトル、作者名、作品の図版の基本情報と、鑑賞のポイントとなるヒントを記載し書き込み欄のあるシートを綴じ込んだ。作品ごとのシートにあるヒントは、鑑賞時に先入観を与えてしまうことのないように極少量に抑えている。

8月27日は運良く天気恵まれた。ワークショップ開始直後は、こどもたちは戸惑っているのか恥ずかしいのか、少し遠巻きにしながら解説を聞いていたが、ひとりひとりに丁寧に声をかけ、名前を呼ぶ、作品を見て触つての感想など話を交わすと、質問や気に入ったところを自ら保護者や担当者に伝えようとする姿勢になるまでにあまり時間もかからなかった。保護者にもこどもと同じワークシートで参加してもらったので一緒になって作品を楽しむ好機

となったようである。

このワークショップ立案当初は、参加人数を多く見込んでいたが、今回は小学校の夏休み終了後の最初の土日の内一日という日取りもあり、予定の20人は下回ったが、最終的には親子、祖父母も含め15名となった。事前告知の効果が届かなかった可能性も否めないが、対象のこどもを持つ家庭からは参加したいのだが今回の日程は都合がつかなく残念という声もあった。こどもたちの参加しやすさを考慮すると、今後は開催日を夏休みなどの長期休暇期間中に動かす、開催回数を増やす、あるいは今回以上に地域の学校や関連施設等と相談を重ね検討すべきかもしれない。しかしながら参加人数が少なかったことでむしろ功を奏した点として、募集段階で希望する世帯には父母に加えて祖父母の同席も可能とした結果、日常では機会の少ない、各家族間で世代を超えて美術を体感する時間を楽しんでいたただけようである。事後のアンケートでは次回の開催を望む声も多く寄せられ、ニーズの高まりも確認できた。これからの取り組みとして、例えばアート・スペースの展示に合わせたワークショップを開催するなどの企画も試みたい。イベントを開催する際、対象の年齢を限定してしまうことが多かったが、総合大学に付属する施設としても幅広い層の人々を受け入れる姿勢はますます望まれていくだろう。



男鹿・大龍寺でのパフォーマンス
ポーランドのダンサーとなまはげの即興
コラボレーション(2015年8月23日)



「国際交流・アジア海域ダンス・プログラム」のチラシ(2016年9月)



「KAMAITACHIとTASHIRO」展
のチラシ(2016年6・7月)



「土方異の秋田、秋田の土方異」
展のチラシ(2016年7～10月)



「開館 鎌鼬美術館」展のチラシ
(2016年10・11月)



鎌鼬美術館の準備会議。民宿格山の囲炉裏端
(2015年12月24日)



鎌鼬美術館の開館セレモニー(2016年10月22日)

芸術を超えて～ 大学と地域の連携と協働

森下 隆

(慶應義塾大学アート・センター所員)

TEXT: MORISHITA, Takashi

東北巡回

「アートと地域社会」は、アートマネジメントの分野における、近年、さまざまな意味で注目のテーマであろう。とくに地域におけるアートフェスティバルは、この時代の必然性をもって、あるいは強迫的に、日本各地で雨後のタケノコのごとく生まれている。

土方異アーカイヴ(舞踏)が地域と関わってきたのは、如上の活動とは異にしているが、地域への発信と地域からの要請とは無縁ではない。そこで、本稿では、アート・センターにおけるアーカイヴの活動と地域へのいわばアウトリーチをめぐる、昨年来の状況を記述しておきたい。

この3、4年、土方異の故郷の秋田において、土方異に光を当てる動きが生まれている。「秋田は舞踏の聖地である」といった主張に、私も加担して、地元紙にその趣旨の文章を寄稿している。

また、地域に根差した文化団体として土方異記念秋田舞踏会が設立され、秋田ではこれまで行われなかった舞踏公演を実施し、あるいは土方異の著作『病める舞姫』の秋田弁による朗読を開始し、現在も継続されている。

秋田に舞踏の拠点を、との考えに基づき、また実現への期待を込めての活動だが、まだ拠点の設立までは至らない。この活動によって、秋田に舞踏家が生まれたとまではいかないからである。

2015年夏には、舞踏のイベントを、東京から秋田へ、さらに青森へと、回流するように展開した。

まず、東京では、8月期に「舞踏交流・海外ダンサーシリーズ2」を港区芸術文化事業助成で実施した。アメリカ、スウェーデン、ポーランド、イギリスのダンサーを招いて、旧ノグチ・ルームでの公演を

実施した。いわば、国際交流と地域への文化の還元を出しにして、舞踏の活動を行っている。もちろん、その逆も言える。

ついで、そのダンサーたちを秋田県男鹿市に招いた。舞踏の研究と実践に関わっているグループPOHRC(ポーク)が活動主体となり、秋田舞踏会の協力を得て実施した。主に外国人向けの舞踏のワークショップが実施された。各国のダンサーたち25名ばかりが、男鹿に集結、合宿して土方舞踏を学んだ。会場は、地元の古刹大龍寺と廃校となった海辺の小学校の講堂を活用した。

さらにワークショップの講師たちの公演が大龍寺の広間や庭園で行われ、地元の人たちが詰めかけて初めての舞踏を興味津々に楽しんでいただいた。このプロジェクトは、男鹿市による会場提供や宿泊補助での支援、そして民間の大龍寺の文化活動への積極的な協力によって遂行することができた。

続いて、秋田のワークショップに参加したダンサーたちの多くが青森に入った。青森では、アート・センターが主催してPSi2016(国際パフォーマンス・スタディーズ学会)を青森県立美術館で開催し、併行して学会のフリンジ企画として青森市中で舞踏イベントを青森の活動団体と共催した。

学会には100人を超える海外からの研究者やダンサーが参加していたが、地域との連携による地方での文化・芸術活動を満喫していただいた。

10月には、「文化による地域創生～北東北からの報告」として、秋田の大龍寺住持三浦賢翁さんと青森の舞踏家福士正一さんを本学に招いてトークセッションを行った。お二人には、秋田、青森それぞれで全面的な協力をもって、事業の成功に大いに貢献していただいていた。

このセッションは、この年の地方・地域(東北)と大学を結んだプロジェクトの総括でもあった。

里のミュージアム

ついで2016年度には、9月に15年と同じく港区の芸術・文化助成によるシリーズで「国際交流・アジア海域ダンスプログラム」を実施した。インドネシアからのダンサーを招き、学内の旧ノグチ・ルーム

とともに、大学隣の寺院龍生院の協力で、同寺の本堂で公演を行い、多くの近隣の住民にも見ていただいた。

龍生院では、1月の「土方異の語ることVI」においても、密教の護摩焚き(声明・読経)に合わせて舞踏公演を行い、会場に溢れるほどの人の参加を得た。

インドネシアのダンサーには、東京公演に先がけて秋田県羽後町田代に来てもらい、同地に開館する鎌鼬美術館の開館イベント「鎌鼬芸術祭」に参加、大野慶人さんたちとともに踊ってもらった。さらに、ポーランドから来日したダンサーとミュージシャンも参加し、地元の芸能や朗読も合わせて、賑やかになり、多くの人たちが観客となって里を訪れてくれた。まさに、鎌鼬の里が豊かな実りの秋になった。

田代は51年前に写真家・細江英公さんが被写体土方異を撮影した山間の村であるが、その地に鎌鼬美術館が昨年(2016年)10月22日に開館した。

土方アーカイヴもその構想段階から美術館の実現に向けての作業に関わった。茅葺き民家の囲炉裏端での、村の寄合の如き準備会議に始まり、この村里に美術館があることの意義や意味を地域住民や町当局に提唱し、地域の人々と協働して美術館設立に取り組んだ。

この間には、本学アート・スペースでの展覧会「KAMAITACHIとTASHIRO」展と秋田市立赤れんが郷土館での展覧会「土方異の秋田、秋田の土方異」展を開催し、鎌鼬美術館の設立に向けてアピールするとともに、地元田代の人たちにもシンポジウムに参加していただき、ともに美術館のあり方を考えることとなった。

土方アーカイヴもその理念から作品・資料提供、展示設営までを担って、里のミュージアムとして開館することができた。美術館が作品展示の場にとどまらず、里の自然や村の人々の暮らしと密接に結びついていることを、この設立過程であらためて問われ、教えられた。

それだけに、美術館の開館が結果ではなくて、これからの美術館運営とともに、稲架田を守り、里の暮らしを見つめる時間と、里に生きる人々との交流が、これからも続くことになる。



旧長谷山邸。鞘堂に覆われた三階建ての蔵は明治期に建造されたもの。



2016年9月に開催された美術館のプレオープンイベントで、インドネシアのダンサーによる踊りを披露。



鎌鼬美術館の開館時には多くの報道陣が取材に来られた。



開館に尽力したNPOの方々。



写真集『鎌鼬 田代の土方異』慶應義塾大学出版会、2016年11月出版。

『鎌鼬』を記念する場を」と本格的に動き出したのが2015年である。

高齢化が進み若者が都会へ出てゆく状況は、ここ田代でも例外ではない。そのような中で地域の人々は、美術館設立にあたって、写真集『鎌鼬』が今やゆるぎない国際的評価を受けていることを知り、改めて芸術作品と向き合った。

写真に写されている稲架田に見るように、51年前と変わらぬ風景を保つ郷土の価値を見直し、暮らしのあり方を再考する場として、すなわち単にアート作品の展示場にとどまらない美術館の存在意義を認識するにいたったのである。

2016年5月にNPO法人鎌鼬の会が設立された。町が管理している明治期に建造された旧長谷山邸の蔵部分を展示施設にすること、広く町内外に美術館の魅力を訴えることからまず始められた。手持ち資金はゼロからのスタートである。改装費用や広報物作成、展示設営費、催事運営の費用をどのように調達するのか。試行錯誤しつつ、企画・運営・広報・ファンディングと、住民みずからが課題解決に取り組んできた。

このことは、地域の人々がアートに関わるマネジメントを自主的に学びながら、事業を展開していく形となり、美術館が県や町が推奨する生涯学習の場とも成り得ているモデルとして考えてもよいだろう。

地方でしばしば見られる、著名な芸術監督やプロデューサー、館長が主導するものとは異なり、ここでは館長職が設けられず、イタチが館長代理としてシンボルとなっている。

日本各地で見られるのと同様、この地域にも若者は少ない。しかしシニア世代の農家の方々や退職後の方々、女性も含めて、新しい価値を自分たちの地域や暮らしの伝統に見だし、活動している。

日本の原風景のような農村には、各地で失われてしまった「稲架がけ」が残されており、牛が飼われ、牛の堆肥が田んぼに利用される「循環型農業」が行われている。そうした自然物、環境も含めた地域全体を保存、継承していこうという取り組みは、よくある「村おこし」とは一線を画している。

住民たちは何度も会合を持ち、広く参加者を募るとともに、行政やマスメディアにも働きかけを行い、そのプロセスにおいて自分たちで地域や社会の課題解決に向かっている。そこには生涯学習の理念が具現化しているように思われる。

生涯学習の領域が単に学術的知識や技能の習得のみならず、生活実践の技や、充実した人生を生き抜くためのコツなども含むことは、経済的・身体的・精神的な幸福を希求する人間の存在意義そのものに深く関わる理念とも言ってよい。そのために、社会教育は「多様な年齢、職業、能力、経験を持つ異質的集団の中で行われること」とされている。

開館にあたっては、アート・センターは展示設営を担当し、開館記念となる写真集(図録)『鎌鼬 田代の土方異』の編集・制作を行った。このようにして生まれた鎌鼬美術館は、大学の研究所と地域のNPOが協働した成果とみなしえよう。入館者も予想以上に多く、写真集の売れ行きも好調である。今後もさらに、美術館運営はもとより、催事の実施や暮らしと自然への関わりなどにおいて協力し、両者の連携について検証する事例としたい。

アートを契機とした地域の「学び」への接続

森山 緑

(慶應義塾大学アート・センター所員)

TEXT: MORIYAMA, Midori

今年度、アート・センターはポーラ美術振興財団からの助成を得て、細江英公の写真『鎌鼬』と秋田の農村写真を比較考察することを目的に調査研究を行っている。その成果は、アート・スペースでの展示「KAMAITACHIとTASHIRO」展とそのカタログおよび、秋田県羽後町田代に2016年10月に開館した『鎌鼬美術館』に関連する活動で発信している。

本稿では、秋田の地域有志がNPO法人を設立し、開館に向けて活動することの意義を、「学び」の観点から述べてみたい。

この美術館構想が出てきた段階から開館まで、理念の共有、催事(プレオープンイベント、「鎌鼬芸術祭」)の企画、展示施設リノベーションの助言、展示作品の調整、展示資料の提供などでアート・センターはファシリテーターとしての役割を担ってきた。

「鎌鼬美術館」とは、細江英公が舞踏家・土方異を撮影した写真集『鎌鼬』にちなんでいる。今から51年前に田代に現われた2人は、わずか2日間の撮影で、この農村の人々に鮮烈な印象を残して風のように去っていった。たった2日の出来事ではあったが、その後、この土地で撮影された写真が『鎌鼬』(1969年出版)となり、高い評価を得て芸術選奨文部大臣賞を受賞した(1970年)。

周知のように細江英公は戦後日本を代表する写真家であり、「鎌鼬」の写真は世界のあちこちで展示されている。昨年か今年にかけて、ロンドンのテート・モダンやウィーン・アルベルティーナ美術館ほかで展覧されている。

さまざまな経緯を経て、田代の住民有志が「ぜひ

活動報告

■催事

慶應義塾三田キャンパス 建築フロムナードー建築特別公開日 慶應義塾の建築プロジェクト

10月7日－8日を建築の特別公開日とし、通常は公開していない演説館・旧ノグチ・ルームを含め、三田キャンパスの建築を紹介した。公開建築物の場所のほか、建築物の簡単な紹介を掲載した「建築マップ」を配布し、自由に見学していただく形をとった。

転位する部屋 ―― 一畳敷と新萬來舎 フォールディング・コスモス×慶應義塾の建築プロジェクト

11月4日－5日に、旧ノグチ・ルームの公開イベント「転位する部屋 ―― 一畳敷と新萬來舎」を開催した。今回のイベントでは、単なる部屋の公開にとどまらず、河川龍夫さんを初めとする現代作家の作品を室内に展示した。また、国際基督教大学湯浅記念館の協力を得て、旧ノグチ・ルームと、松浦武四郎の書斎「一畳敷」を照らし合わせながら、建築物の役割や建築物の含み込む人々の記憶について考える試みを行った。一畳敷に関する網羅的な研究をされた、コロンビア大学名誉教授ヘンリー・スミス氏に、ゲスト・スピーカーとしてご登壇いただいた。同氏からは建築物の保存や活用を考えると、その建築物を実際に使っている人々との関わりを気にかけることが必要だ、という指摘があるなど、今後の慶應義塾の建築プロジェクトの活動、またノグチ・ルームアーカイヴの活動にも大きな示唆を得た。

没後31年 土方巽を語ることVII

1月21日に恒例の「土方巽を語ること」を東館5階会議室で開催した。昨年は没後30年で賑やかなイベントであったが、今年は規模を小さくして実施。70名ばかりの参加者を迎えたが、若い人も増え、かつ土方の故郷秋田からの参加者もあって、土方巽を偲ぶ時間をもつことができた。没後30年のメモリアル公演などを紹介しつつ、参加者の発言をいただいた。秋田在住の佐藤正和さんによる一人芝居「巽の犬」の上演。そして、昨年10月に逝去された美術家の中西夏之さんを悼み、中西研究の永松左知さんにお話をいただいた。中西さん絵画と土方の舞踏の関わりを強調されて反響があった。今年も土方巽をめぐる貴重な交流の場と時間となった。

アムバルワリア祭 VI 西脇順三郎と芭蕉

1月29日に北館ホールにて開催され、100名ほどの来場者があった。西脇研究の第一人者である新倉俊一氏による導入コメントののち、詩人で三田文学の理事長である、吉増剛造氏が「雑神と雑草」と題して話された。吉増氏の制作による「gozoCiné」から、芭蕉の足跡をたどった「山寺フィルム―奥の細道」を上映、吉増氏の解説を伺いつつ鑑賞するという、贅沢な時間が過ぎた。俳人の高柳克弘氏は、「芭蕉と西脇―旅人ふたり」のタイトルで、対象とするテーマや時代の差異にもかかわらず、二人に共通点があることを改めて示してくださった。西脇研究会のコア・メンバーでもある詩人の杉本徹氏は、「超『名利栄達』主義詩論」と題して、二人に通底する執着しない生き方から自然に生まれ出る詩、句、ことばについて熱く語ってくださった。後半、フロアからの質問を受け、登壇者の方々からは更なるお話や意見が出されて大いに盛り上がった。また懇親会でも、三田文学や詩人の方々、西脇の故郷、新潟県小千谷市からいらした方々との活発な交流が行なわれた。

■アート・スペース展示(2016年10月以降)

慶應義塾大学 文学部 古文書室展 IV 書き留められた移動

10月3日－28日 ＊主催：慶應義塾大学文学部古文書室、慶應義塾大学アート・センター

描かれた古 ― 近世日本の好古と書物出版 ― センチュリー文化財団寄託品展覧会

11月14日－12月16日 ＊主催：慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、慶應義塾大学アート・センター、慶應義塾大学図書館

アート・アーカイヴ資料展XV「なだれうつ! アヴァランチ」

2017年1月11日－3月17日 ＊主催：慶應義塾大学アート・センター

■研究会関連

mandala musica

旧「拡張するジャズ」研究会は平成28年度、発展的に改組されて、多角度から「音楽研究」にアプローチする「ブラット・フォームの研究会」となった。mandala musica には、以下の研究プロジェクトが協働しつつ共存している。①「拡張するジャズ」：従来の油井正一アーカイヴの活動を継承し、訪問所員の川中ヨウ氏を中心にジャズの歴史を多角度から考察していく。②「Pop Japan Project」：NHKワールドとの協働のもと、日本のポピュラー音楽が世界各地でどのように受容されているかを研究する。また、日本音楽の海外発信の可能性について、芸術理論的側面とアート・マネジメント的な側面の両面から研究する。③「音楽アンサンブル・プロジェクト」：メディアデザイン研究科で過去数年にわたって研究されてきた「教養教育としての楽器アンサンブル学習」を理論面、実践面ともに発展されるプロジェクト。学生たちや一般人が「楽器演奏」を学ぶことの「意味」と「方法」について研究を行う。④「普遍音楽プロジェクト」：ゲーテ、キルヒャー、ブルーメン、フィッシャー、さらには古代の思想家たちも参照しながら、現代では「芸術」のジャンルとなっている「音楽」という営為を「普遍学」「普遍楽」として捉えなおすべく、哲学的探究を行う。以上の複数プロジェクトが相互に協働しながら発展していくことを目指している。

アーカイヴの形態学研究会

旧「アーカイヴの思想研究会」が発展的改組された研究会。多分に言語の領域である「思想」にとどまらず、マテリアルなものがある「形態」や「秩序」をおびることで「知」や「認識」が生まれる現象についても考察し、部分的には実践も行っている。学知とマテリアルが接続される場である「アーカイヴ」というものを可能な限り多角度から考察し、学知の基礎となる装置および作業をより鮮明に認識することを目指す。28年度も、読書会を中心に、勉強会・討論会を行ってきた。

感の融合研究会

2016年度に発足した「感の融合研究会」では、本年度、美術鑑賞における心理学的機能と意義についての実証的・分析的な研究を進めており、実験的手続きや鑑賞実験ワークショップを通してどのように鑑賞行動が変容するかについての分析を進めてきている。企業や美術館との共同研究を通して、鑑賞における対話がどのように見方や感じ方を変えるのか、その変容過程について検討している。また、2017年3月にはウィーン大学の研究者と共にジョイントワークショップを開催し、実証的な美術鑑賞研究についてのチュートリアルを講義・実習する予定である。

西脇順三郎研究会

新倉俊一氏を中心に、毎月開催している本研究会は、現在のところ4月から10月まで計5回の研究会を開催している。発表の担当者は4/11(野村喜和夫氏)、5/16(八木幹夫氏)、6/27(久村亮介氏)、9/26(エリック・セランド氏)、10/17(杉本徹氏)であった。テーマは、西脇詩学や文学論、ランボーとの比較検討、翻訳の問題等々多岐に渡り、参加者による熱い議論と西脇の詩世界の探求が継続して行われている。

ARTLET 第47号

発行日：2017年2月28日

編集：内藤正人 条川麻里生 後藤文子 渡部葉子
小菅隼人 徳永聡子

制作：印象社

発行：慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

TEL：03-5427-1621(直通)

FAX：03-5427-1620

<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

E-mail: ac-office@art-c.keio.ac.jp

COPYRIGHT ©2017
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンター HPをご覧ください。

